

日記式質問紙を用いた日常生活出来事 における自己評価過程の検討 (注1) (注2)

西村 太志 (注3)

東亜大学 総合人間・文化学部 心理学研究室

E-mail: taishi@toua-u.ac.jp

浦 光博

広島大学 総合科学部 行動科学講座

E-mail: urappie@hiroshima-u.ac.jp

要 旨

本論文では、自己評価過程の様相を日常生活の中での相互作用において検討するために、日記式質問紙を用いた検討を行った。32名の看護学校生が3日以上質問紙への回答を行った。課題遂行に関連した出来事を経験した際に、相互作用対象として実際に選択した他者の属性やそのときの自尊心、また顕現化していた自己評価動機についての回答が求められた。分析の結果、以下のことが示された。(1)課題遂行に関連した出来事を経験した時に自己査定動機が顕現化すると、客観的な他者の選択が多く行われやすくなる。(2)低自尊状態であっても高自尊状態であっても、自己評価動機は同程度に顕現化しており、自己に関連した情報を能動的に求めようとする志向性は同様に持っている。(3)高自尊状態では、客観的な他者の選択が多く行われる傾向にあり、状況の要請と適合した他者の選択が行われやすい。一方、低自尊状態では情緒的な他者の選択が多く行われる傾向にあり、状況の要請と適合した他者の選択が容易には行われにくい。以上の結果から、自尊心の程度の違いにより、自己評価過程における他者選択の様相が異なる可能性について示唆がなされた。

問 題

人は、日常生活の中でどのように自己を理解し、その上で他者との相互作用を持つのであろうか。西村・浦(2002)や西村・浦・長谷川(2000)は、自己が直面している状況の要請に伴い、その状況の特質に応じた自己評価動機が顕現化し、その反映として異なった属性を持つ他者の選択が行われることを明らかにした。具体的には、課題遂行に関連した出来事が生じた時には、社会情緒的な出来事が生じた時と比較して、自己査定動機が顕現化しやすく、さら

に、その出来事が起こった直後には、自己にとって客観的な意見を伝える人物が選択されやすいことが示された。これらの結果は、自己評価過程の理解にとって有益な示唆をもたらす結果であり、Sedikides and Strube (1997)のSCENT (Self-Concept Enhancing Tactician; 自己概念高揚戦略)モデルの主張を支持する結果であった。

しかしながら、これらは場面想定法を用いた質問紙調査によって得られた結果である。これらの結果は理論的にも了解可能であり、方法論上の問題点によりその結果が軽視されるものでは決してない。けれども、自己評価過程のより

詳細な理解のためには、対人関係の中で現実に展開されている他者選択と、その背後に潜む動機的側面をよりダイレクトに検討することが望ましい。このような直接的把握を行うためには、実験室における実験手法や縦断的な調査手法に頼ることよりも、実際に対人関係の中での相互作用を何らかの方法で記録することが必要であると考えられる。

このような場合、従来の心理学的検討では観察法の手法が多く用いられる。しかしながら、本研究のような、ある状況下で個人がいかなる動機を持ち、それに基づいていかに行動したかを検討する際には、観察データのコード化等による方法によっては、それらが十分同定できるとは必ずしもいえない。

それでは、どのような方法を用いればよいのだろうか。本研究では、日記形式の質問紙を用いて自己評価過程における他者選択の様相をできるかぎり直接的に検討する。そして、想定法の方法論を用いて得られた結果と比較検討することとする。

日記式質問紙は、日常の社会的相互作用や、経験する出来事の把握のために用いられる調査技法である。ある一定期間、調査参加者に携帯可能なバインダーや手帳を持参させ、設定した事象を経験した時に記入させたり、就寝前のような決まった時間にその日経験した、出来事などについて記入を求めたりするというものである。この方法を用いた検討は、欧米では、社会的比較研究や (e.g., Wheeler & Miyake, 1992)、自己概念の明確性と適応との関連性などを扱った研究 (Nezlek & Plesko, 2001) で行われている。Wheeler and Miyake (1992) の用いた方法は、回答者が日常生活で社会的比較を行った時にこれを記録してもらい、それぞれの社会的比較事例に関して誰と比較したか、どのような次元で比較したか、比較前後にどのようなムードを経験したか、などの質問に答えてもらうというものであった。Wheeler and Miyake (1992) は、この方法を用いることで、社会的比較の想定に関するいくつかの問題点を回避することができると主張している。それ

は、想起の難しさや、ある特定の非常にインパクトの大きい出来事のみを想起してしまいやすくなることを避けることができることである。また、Nezlek and Plesko (2001) の研究では、参加者は10週間にわたり日々の自己概念の明確性、気分、自尊心と毎日経験した出来事を記述した。その結果、日常の自己概念の明確性が、気分や自尊心と関連するを見いだし

ている。欧米と比較して日本では、この方法を用いた検討はこれまであまり行われているとは言えない。数少ない例ではあるが、三宅(1997)は相互作用の頻度や対象と、自己の孤独感との関連性を検討した。そして三宅(1997)は、実際の相互作用の様相を直接的に把握できるものとして、日記式質問紙という方法論の有効性を指摘している。

以上のような先行研究をふまえると、自己評価過程に関する検討において、日記式質問紙を用いることにはいくつかの利点があると考えられることができる。それらの利点は、実際の相互作用場面での選択を直接把握することが可能であることによって生じる。まず、Wheeler and Miyake (1992) も指摘しているとおり、事前の教示により、他者との相互作用場面での選択や比較がある種の規範に則したものであることを認識させることができる。そのため、想起や社会的望ましさのバイアスを最大限除去したデータの把握が可能となる。さらに、他者の選択と気分、自尊心などの関係性をよりの確に把握することもできる。また、西村他(2000)では、主に状況的側面に焦点を当てた検討を行った。しかしながら、多くの研究で、自己評価過程に影響を及ぼす個人差変数の存在が指摘されている (e.g., Roney & Sorrentino, 1995; Sedikides & Strube, 1997)。とりわけ、自己評価動機の視点と実際の情報収集において、高自尊心者と低自尊心者ではその様相が異なる可能性がある。この点に関しては、ウッド・ロックウッド(2001)が自己に関する情報収集の方略としての社会的比較の様相が、高自尊心者と低自尊心者では異なると示唆していることから

も了解可能である。そこで本研究では、自己評価過程に影響を及ぼす要因として、状況的側面のみならず個人特性にも着目して検討を行う。とりわけ、自己評価動機の顕現化や他者選択に、出来事が生じた時の自尊心、すなわち状態自尊心がどのように影響しているのかを主に検討する。その理由は、出来事を経験してすぐの状態における他者の選択などを測定するため、状態自尊心も同時に測定することにより、自尊心と他者選択の様相について、詳細な検討が可能になるからである。また日記式質問紙の実施期間の後に特性自尊心を測定し、状態自尊心と併せて検討する。これにより、特性自尊心と状態自尊心の差異を考慮しつつ自己評価過程についての検討を行うことが可能となる。

なお本論文では、西村他(2000)の検討とは異なり、自己関連出来事を課題遂行に関連した出来事のみ限定した。その理由の一つは、日記式質問紙が参加者に多くの負担を求めるということにある。課題関連と社会情緒双方の出来事についてすべての記述を求めることによって、参加者の負担が過度になることを考慮した。そして、記述がどちらかといえば容易で、また明確に目標や相互作用の内容が記述しやすいと考えられる課題遂行に関連した出来事を経験した時の相互作用についてのみの記述を求めた。さらに、西村他(2000)の検討から、自己査定動機が他者選択に直接的な影響を及ぼすのは、課題に関連した出来事を経験した時だけであることが示唆されている。そこで、課題遂行に関連した出来事を経験した時の自己評価動機や他者選択の様相と、その選択に及ぼす個人特性の影響を本研究では重点的に検討する。

方 法

調査対象者・時期

看護学校生 50 名(女性 48 名、男性 2 名、平均年齢 19.6 歳)を対象に、2001 年 2 月 27 日～3 月 5 日の 7 日間連続して調査を実施した。

調査の概要

調査初日に、調査全体の概要の説明を行っ

た。その際に調査参加への承諾を 49 名から受けた。そして、B6 版の 6 穴バインダーを参加者全員に配布した。バインダーには、一日分の質問紙として、出来事が起こったときに回答する質問紙を 4 セット、夜就寝前に回答する質問紙を 1 セット、計 5 セットの質問紙を綴じておいた。

各参加者には、“この質問紙は、看護実習や学校での勉強に関することで、誰か他の人に自分のことについて意見を聞いたり相談したことについて尋ねるものです。自分が関係する出来事を経験した時に、誰か他の人に話や意見を聞いたり相談したときには(電話なども含む)、できるだけ早くこの日記式質問紙に回答して下さい。”と教示した。また、一日の中で異なる出来事を複数回経験した場合には、それぞれを別の質問紙セットに回答するよう求めた。一日の間にそのような出来事を経験しない場合、出来事の質問紙に関する回答は行わないようにすることも求めた。

就寝前には、いくつかの質問項目に回答させた。その回答の後に、その日の質問紙セットをバインダーからはずし、翌日の質問紙セットをバインダーに綴じるよう教示した。質問紙の回収は、一日分の出来事に関する質問紙と就寝前に回答した質問紙を、予め配布しておいた封筒に入れ、密封して学校に備え付けたポストに入れさせることによって行った。未回答の質問紙セットもできるだけ一緒に同封するように教示した。質問紙の回収は、調査実施者である筆者が定期的に行った。

調査最終日に、予告していた調査参加への謝礼を各参加者に渡した。また、特性自尊心や人口統計学的変数に関する質問紙への回答を求めた。

日記式質問紙の構成

本研究では、出来事を経験したときに記入させた日記式質問紙についての分析を主に行っている。それは、本研究の目的の一つが、出来事が起こった時の他者選択の様相を直接的に把握することであるからである。したがって、ここでは後の分析と関連する質問紙構成項目につい

て説明する。

出来事の記述 課題遂行（特に看護領域に関すること）に関連する出来事が生じ、かつそのことについて誰か他の人に話を聞いた場合に、その出来事の内容を記述させた。

状態自尊心 Rosenberg (1965) の自尊心尺度邦訳版（山本・松井・山成、1982）から、Nezlek and Plesko (2001) に基づき4項目をワーディングし直したものを7件法で用いた。その出来事が起こったときの自尊心を測定できるように修正している。具体的な項目内容は、“今の私が好きである” “自分は敗北者だと思う” “だいたいにおいて、自分に満足している” “何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う” である。得点が高いほど、状態自尊心が高いことを意味する。

相互作用対象となった他者のイニシャルの記述、属性、関係性の評価 記述した出来事が起こったときに相互作用を持った他者のイニシャルを記載させた。さらに、その他者に対して自己がどのような情報を求めているかを測定するために、その人物が客観的な人物か情緒的な人物かについて二者択一形式で回答を求めた。西村他 (2000) ではこれと同様の測度として間隔尺度方式のものを用いたが、本研究では調査対象者の負担を考慮して、二者択一形式のものとした。客観的な人物の選択肢は、“どちらかといえば、現実的なアドバイスや情報を与えてくれ、悪いところもきちんと指摘することを望んでいる” であり、情緒的な人物の選択肢は、“どちらかといえば、あなたの気持ちを理解してくれたり、あなたに起こったことを自分のことのように考えてくれることを望んでいる” であった。

他者のイニシャルの記述欄は10個設け、相互作用をした他者全員のイニシャルを記入することを求めた。また、それぞれの人物が客観的な人物か、それとも情緒的な人物かについても、選択した他者全員に関して二者択一で回答を求めた。

自己評価動機の測定 自己評価動機概念に即して独自に作成した5項目の中からあてはま

るもの全てを選択させた。尺度項目の内容は、“その人が自分の手本となる対象なので”、“自分自身やその状況についてよりよく思うために”、“自分自身について今以上に知りたいと思ったので”、“自分自身について自分が思っていることと同じことを言ってくれると思ったので”、“以上のどれにも当てはまらない、なんとなく” である。最後の項目のみ選択した場合と、それ以外の項目を一つないしは複数選択する場合が存在する。

特性自尊心の測定

調査最終日に、調査についてのディブリーフィングとお礼をし、その際に Rosenberg (1965) の自尊心尺度邦訳版（山本・松井・山成、1982）を測定した。10項目5件法で測定した。得点が高いほど、自尊心が高いことを意味する。

結果

まず、出来事の記述に関しての内容の確認を行った。出来事の記述内容を確認した上で、課題遂行に関連する出来事に関連した記述を行った回答のみを分析対象とした。記述した出来事の内容が、恋人との別れ話などの課題遂行に関連した出来事ではないものは分析から除外した。

収集された記述に関する基礎統計とデータ分類

今回の調査で、3日以上出来事の記述、ないしは就寝前質問紙のいずれかの質問紙に回答したものは32名（調査参加者の66.7%）であった。以後の分析にはこの32名の記述データを用いている。その理由は、2日以下しか回答していないものは、調査初日の就寝前質問紙のみの回答がほとんどであり、出来事の記述に関してもその記述の信憑性が低いと判断したからである。現にこれらの回答をほとんど行っていない者は、白紙の質問紙を提出することも行っていなかった。これは、回答することをいったん承諾したが、日記式質問紙の参加者への負担の高さから、実際に回答を行わなかったと考えられる。

Table 1

The contents of self-evaluation motivation items and each number of case.

The content of items	The number of cases
1. Since he/she is a model of me.	28
2. Since I want to feel good about myself and the situation around me.	13
3. Since I want more information about myself and the situation around me.	11
4. Since I want suggestion or advice of which contents are expected by me.	56
5. None or applied to neither	45

Note. Since there are the cases in which participants selected more than two motives, the sum total does not match the number of case.

32名が回答した記述数は全部で133個であった。一日あたりの記述数は0—4個の範囲である。記述数は人数と日数から考えると必ずしも多いとは言えない。この理由として課題遂行に関連した出来事を経験し、かつそのことについて他者と相互作用を持ったという前提を設定したこと、土日は学校が休みであり、その間は課題遂行に関する相互作用がほとんどなかったことが挙げられる。なお以後の分析では、調査対象者単位ではなく、記述した出来事単位での分析を行っている。

各出来事時に調査参加者が選択した他者の数は、1—8名の範囲だった。選択した他者の属性について、各出来事時に選んだ人物のうち客観的人物を多く選んだのか、情緒的人物を多く選んだのかを調べたところ、選んだ人数のうち客観的他者の方が多かったケース（客観的他者優勢ケース）が56ケース、情緒的他者の方が多かったケース（情緒的他者優勢ケース）が58ケースだった（注4）。

状態自尊心は、各出来事記述時に測定した4項目を合計した（ $\alpha = .81$ ）。そして、合計得点の中央値でケースを分割した。高自尊心ケースは52ケース、低自尊心ケースは60ケースである。

各出来事における自己評価動機の顕現化の有無と動機内容の確認

出来事が起こったときに顕現化した自己評価動機について、Table 1にその内容とケース数を示した。いずれかの自己評価動機が顕現化したと答えたケースが68ケース、いずれの動機

も顕現化していないと回答したケースは45ケース存在した。

ケース数のばらつきのため、項目内容を吟味し、項目1と3をあわせて自己査定動機、2と4をあわせて自己高揚動機とし、それぞれの動機が顕現化したケースにおいて、選択する他者の属性が異なるか否かを検討した（注5）。

自己評価動機の顕現化と選択他者の属性との関連

自己査定動機ケース、自己高揚動機ケース別に選択他者の優勢度の比較を二項検定で行った。その結果、自己査定動機が顕現化した際には、客観的他者を多く選択しやすいことが示された（客観優勢21ケース：情緒優勢7ケース、 $p < .01$ ）。一方自己高揚動機に関しては、選択他者属性の優勢度に違いは認められなかった（客観優勢34ケース：情緒優勢24ケース、 ns ）。

以上の結果は、課題遂行に関連した出来事を経験した時に自己査定動機が顕現化したときには、客観的な情報を収集することへの志向性が高まり、自己にとって客観的な人物を選択しやすいということを示すものである。情緒的な他者の選択に関しては、設定した状況が課題遂行に関連した出来事に限定されているために、顕著な違いが認められなかったと考えられる。

状態自尊心と自己評価動機の顕現化の関連性

状態自尊心と自己評価動機の顕現化の関連性を検討するために、クロス集計を行った。その結果をTable 2に示した。

Table 2

The cross table of self-esteem and self-evaluation motivation

	The emergence of self-evaluation motivation		
	None	More than one	Total
High self-esteem case	25	27	52
Low self-esteem case	19	41	60
Total	44	68	112

χ^2 検定を行ったところ、有意な偏りのある傾向が認められた ($\chi^2(1) = 3.15, p < .09$)。自尊心が高い場合と比べて、自尊心が低い場合の方が自己関連情報の収集がより自己評価動機の充足という能動的な目的に基づいて行われることが示された。これは、ネガティブな出来事を経験したときにはポジティブな出来事を経験した時と比べて、自己評価動機が顕現化しやすいという西村・浦 (2002) における結果とも一致するものである。

状態自尊心と他者選択

状態自尊心と選択他者属性の関連性を検討するために、クロス集計を行った。その結果を Table 3 に示した。

χ^2 検定を行ったところ、有意な偏りのある傾向が認められた ($\chi^2(1) = 2.86, p < .10$)。状態自尊心が高い場合、課題遂行に関連した出来事を経験したときという状況の特質と適合し

た他者の選択、すなわち客観的な他者を選択する傾向にあることが示された。一方、状態自尊心が低い場合には、状況の特質とは適合するとは言えない情緒的他者を選ぶ傾向にあることが明らかとなった。

なおこの結果は、特性自尊心によって調査参加者を群分けし、特性自尊心と選択他者属性の関連を見たクロス集計における χ^2 検定においても同様の結果が得られている ($\chi^2(1) = 4.24, p < .05$)。クロス集計の結果は Table 4 に示した。

考 察

本研究は、日記式質問紙を用いて、自己評価動機と他者選択の関連性、および自尊心と自己評価動機、他者選択との関連性を検討した。その結果、これまでの検討 (西村他, 2000; 西

Table 3

The cross table of state self-esteem and the characteristics of "Reference Person"

	The majority of "Reference Person"		
	More rational	More compassionate	Total
High self-esteem case	30	22	52
Low self-esteem case	25	35	60
Total	44	68	112

Table 4

The cross table of trait self-esteem and the characteristics of "Reference Person"

	The majority of "Reference Person"		
	More rational	More compassionate	Total
High self-esteem case	36	23	59
Low self-esteem case	19	34	53
Total	55	57	112

村・浦, 2002) で得られた結果を追証するものと、これまでの検討では得られなかった新たな結果が得られた。ここではそれぞれについて言及し、考察を加えることとする。

まず、西村他 (2000) の結果を追証する結果として、以下の2つが得られた。一つは、課題遂行に関連した出来事を経験した時には、自己査定動機が高まることにより、自己にとって客観的な情報を提供するとみなしている他者の選択が行われやすいということである。また今回設定した状況はすべて課題遂行に関連した出来事を経験した時なので、そのときに自己高揚的な動機が高まったとしても、情緒的な意見を提供するとみなしている他者の選択に偏ることなく、客観的な情報の収集も行おうとしていたと考えることができる。この結果は、自己評価過程における他者選択が、動機的要因の影響と状況的要因の影響の双方を受けて成立することを示す結果である。そして、西村他 (2000) が想定法を用いて得た他者選択の様相の結果と同様の結果が、実際の対人相互作用場面でも認められることを示すものである。これは、本論文の基本的な命題の頑健さを示す結果である。

さらに、新たなる問題を提起する結果も示された。それは、課題遂行に関連した出来事が生じたときに喚起される自己評価動機の種類と、そのときに相互作用対象として選択される他者の属性との一致不一致が、状態自尊心の高低と関連していることが示されたのである。状態自尊心と自己評価動機の間連性の結果から、低自尊状態にあるか高自尊状態にあるかにかかわらず、課題に関連した出来事を経験した時には、自己に関連した情報の収集に対する志向性が高まることが示された。しかしながら、他者選択の段階においては、高自尊状態と低自尊状態ではその様相が異なっていた。高自尊状態では、客観的な他者の選択がより多く行われる傾向にあるが、低自尊状態では、情緒的な他者の選択がより多く行われる傾向が認められたのである。

これらのことから、課題に関連した出来事を経験した後、低自尊状態に陥ったときに、人は

正確な情報の獲得を志向するけれども、実際の情報の獲得や処理の段階では、状況の要請と適合しない他者選択を行いやすくなると考えることができる。この状態では、低自尊心者が自己認識の正確性と肯定性の間の葛藤にさいなまされるという認知と情緒の板挟み状態 (cognitive-affective cross-fire; e.g., Swann, Griffin, Predmore, & Gaines, 1987) に陥っている可能性が考えられる。これは、認知的な志向性や動機付けのレベルでは正確な情報を希求するが、その正確性を実際に獲得することへの脅威を感じ、他者の選択においては情緒的な安定や支持を求めようとするということである。

そしてこのことは、低自尊心者が自己評価過程を、状況の要請に則した形で適切に遂行することが容易ではない、ということを示唆する結果であると言える。そうであるならば、低自尊心者の他者選択の基準が心理的紐帯の確立であるという Rudich and Vallacher (1999) の示唆と一致する結果とも言える。このような、低自尊心者においては自己評価の動機と他者選択のズレが認められることについては、今後より詳細な検討を行うことが必要である。

日記式質問紙を用いた本研究の検討から、概ねこれまでの自己評価過程に関する結果に即した結果が得られた。このことは自己評価過程における他者選択の様相が、方法論的に多様な視点から捉えることが可能であることを示すものである。しかしながら、いくつかの問題点が指摘できる。まず、実施に際し参加者の負担が大きいたことが最大の問題点としてあげられる。この調査においても、17名の参加者のデータは事前に承諾を受けていたにも関わらず、分析に用いることができなかった。彼らは意図的に調査への参加を放棄したわけではなく、日常生活の多忙さなどの様々な理由から回答することを行わなくなったと考えられる。また、実際の相互作用を自己記述させるという方法は、調査実施者側の操作が困難な方法である。そのため、当初意図していなかった出来事の記述や動機項目の分布の不明瞭さが生じたとも言え

る。日記式質問紙を用いた本研究の結果のみで自己評価過程の理解を行うことは困難であるが、その他の方法論を用いた検討の結果と包括的な視点から検証することで、自己評価過程のより詳細な理解につながると考える。

日記式質問紙の限界と可能性

本研究では、日記式質問紙を用いて社会的相互作用の中で展開される他者選択の様相を直接的に把握することを試みた。日記式質問紙にはいくつかの限界があることが本研究の実施において示された。一つは回収率の低さである。本調査の実施においては、調査者が2日に1日のペースで調査対象者の学校に出向き、調査票の回収の際に回答への依頼を口頭で行った。しかしながら、一度回答を行わない日があると、その後再び回答をすることはほとんど無かった。このための改善点として、最近携帯電話のweb機能、およびメール機能を利用した調査の可能性が指摘され、検討がなされはじめている(e.g., 森・高比良・稲葉, 2004)。学生層の携帯電話の普及率の高さを考えると、データ収集の即時性がありまた比較的負担が少ない方法として、携帯電話を利用したデータ収集の活用は今後幅広く行われると考えられる。本研究のような、日常出来事と他者との相互作用の関連を直接的にとらえる方法としては、有効な方法であると考えられる。その際には、質問項目の簡素化などの工夫が必要である。

また、このような日記式の質問紙で得られるデータは、多くの場合多層構造を想定したものであることが多い。その際には、分散分析や重回帰分析などの、従来心理学領域で多く用いられてきた分析手法だけでは、その特徴を十分に把握できるとは言えない。このことは近年社会心理学分野でも指摘されており(e.g., Nezlek, 2001)、階層的線形モデル(Hierarchical Linear Model:HLM)を用いた分析方法が用いられることが多くなっている。本研究の測定データは、データ数の不足およびデザインの一部不備でこの分析手法は実施できなかったが、今後調査技法と併せてこのような有効な分析手法をとるための工夫が必要となってくると言え

る。

注

- 1) 本研究の遂行に際し、文部科学省科学研究費補助金の補助を受けた。
- 2) 本調査の実施に際して多大なる協力を受けた広島県内の某看護学校のスタッフの皆様、および調査協力者の方々に記して感謝申し上げます。
- 3) 本研究の調査は、筆者が広島大学大学院生物圏科学研究科在籍時に行った。
- 4) 選択他者の属性に関しては、選択した人数が偶数になった場合、客観的他者と情緒的他者の選択数が同数となるケースが存在する。しかし、このケースは発生確率が少なく、実際8ケースしか存在しなかったため、分析から除外した。最終的な分析は、114ケースで行った。
- 5) なお、この分類の妥当性を検討するために、大学生45名を対象に別途調査を行った。この調査では、それぞれの項目内容が自己査定的な内容、および自己高揚的な内容をどの程度反映した記述であると思うかについて回答を求めた。その結果、項目1と3は自己査定的な内容であると評価され、項目2と4は自己高揚的な内容であると評価された。

引用文献

- 三宅邦建 (1997) 社会的相互作用記録作成の試み：社会的相互作用、孤独感、マキャベリズム 日本社会心理学会第38回大会発表論文集, 124-125.
- 森津太子・高比良美詠子・稲葉哲郎 (2004) 携帯電話を使った調査の可能性(1)——回答率・回収までの時間から見た有効性の検討—— 日本心理学会第68回大会発表論文集, 183.
- Nezlek, J. B. (2001) Multilevel random coefficient analyses of event and interval contingent data in social and personality psychology research. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 27, 771-785.
- Nezlek, J. B., & Plesko, R. M. (2001) Day-to-day relationships among self-concept clarity, self-esteem, daily events, and mood. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 27, 201-211.
- 西村太志・浦 光博 (2002) 状況要因が自己査定動機と自己高揚動機の顕現化に及ぼす影響 対人社会心理学研究, 2, 45-49.
- 西村太志・浦 光博・長谷川孝治 (2000) 出来事の

- 特質の差異が自己評価過程における他者選択に及ぼす影響：自己査定動機と自己高揚動機の観点から 社会心理学研究, 16, 39-49.
- Roney, C. J. R. & Sorrentino, R. M. (1995) Self-evaluation motives and uncertainty orientation: Asking the "who" question. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 21, 1319-1329.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton Univ. Press.
- Rudich, E. A., & Vallacher, R. R. (1999) To belong or to self-enhance? Motivational bases for choosing interaction partners. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 25, 1387-1404.
- Sedikides, C. & Strube, M. J. (1997) Self-evaluation: To thine own be good, to thine own self be sure, to thine own self be true, and to thine own self be better. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, Vol. 29 (pp. 209 - 270). California: Academic Press.
- Swann, W. B. Jr., Griffin, J. J. Jr., Predmore, S. C., & Gaines, B. (1987) Cognitive-Affective crossfire: When self-consistency confronts self-enhancement. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 881-889.
- Wheeler, L. & Miyake, K. (1992) Social comparison and everyday life. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62, 760-773.
- ウッド J.V.・ロックウッド P. 山上真貴子 (訳) (2001) 低自尊心者の社会的比較 コワルスキ R.M.・リアリー M.R. (編著) 安藤清志・丹野義彦 (監訳) 臨床社会心理学の進歩 北大路書房 (Wood, J. V. & Lockwood, P. 1999 Social comparison in dysphoric and low self-esteem people. In R. M. Kowalski & M. R. Leary (Eds.), *The social psychology of emotional and behavioral problems*, (pp. 97-136). Washington DC: APA.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982) 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究 30, 64-68.

Abstract

The examination of the self-evaluation process in
everyday life events: a diary study.

Nishimura Takashi

Division of Psychology, Faculty of Integrated Cultures
and Humanities., University of East Asia

E-mail:taishi@toua-u.ac.jp

Ura Mitsuhiro

Department of Behavior Sciences, Faculty of Integrated
Arts and Sciences, Hiroshima University

E-mail:urappie@hiroshima-u.ac.jp

The present study investigates the self-evaluation process using a diary-style questionnaire. Forty-nine nursing school students were asked to write down the details of task-relevant events, to answer state self-esteem and self-evaluation motivation questions, and to write the name of persons whom they selected as "Reference Persons," as soon as possible after experiencing the events. Thirty-two participants wrote in their diary-style questionnaire more than three days per week. Three main results were found: (1) When self-assessment motivation was present during task-relevant events, participants tended to select a very objective "Reference Person"; (2) Motivation for self-evaluation occurred equally for people with low and high self esteem, and persons with low state-self-esteem had much the same intention of seeking self-relevant information as those with high state-self-esteem; (3) Persons with high state-self-esteem tended to select more a objective "Reference Person" suitable to the requirements of the situation. On the other hand, persons with low state-self-esteem tended to select a more compassionate "Reference Person" suitable to the requirements of the situation. These results suggest that there are differences in the selection of a "Reference Person" in the self-evaluation process of individuals with high and low self-esteem.